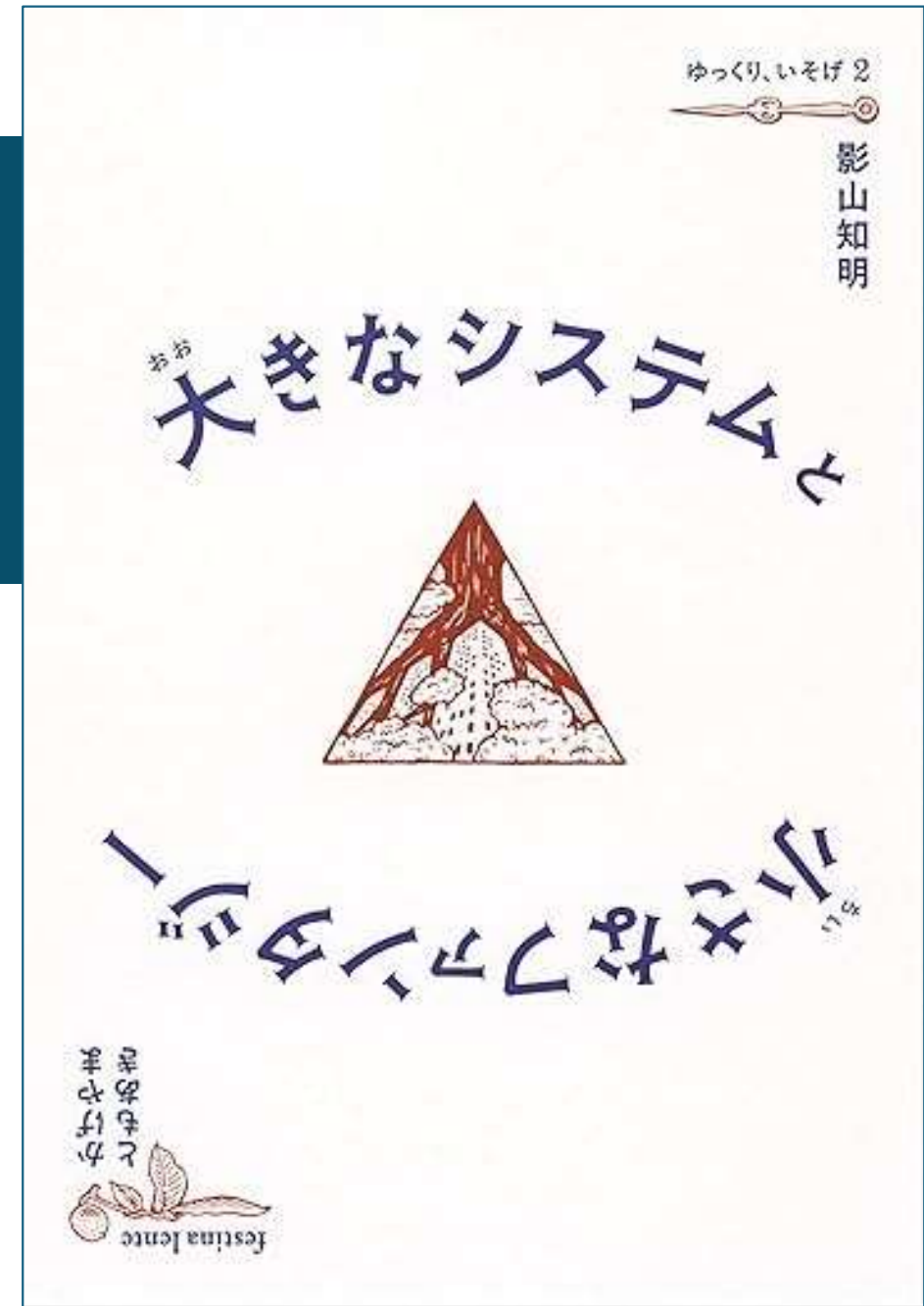


# 第56回 対話研究会





1

# ご紹介

# 著者 影山 知明さん

1973年、東京・西国分寺生まれ

東京大学法学部卒業後、マッキンゼー・アンド・カンパニー社を経て、独立系ベンチャーキャピタルの創業に参画

その後、株式会社フェスティナレンテとして独立

2008年、生家を建て替え、多世代型シェアハウス「マージュ西国分寺」を開設

1階には、こどもたちのためのカフェ「クルミドコーヒー」を開業。

2017年には、2店舗目となる「胡桃堂喫茶店」をオープンさせた

店を拠点として、まちの仲間と共に、クルミド出版、胡桃堂書店、クルミド大学、クルミド／胡桃堂の朝モヤ、地域通貨ぶんじ、ぶんじ寮等を事業化

開かれた場づくりから、一つ一つのいのちが大切にされる社会づくりに取り組む

※ 「ゆっくり」と「いそげ」の二刀流として、大谷翔平にライバル心を燃やす



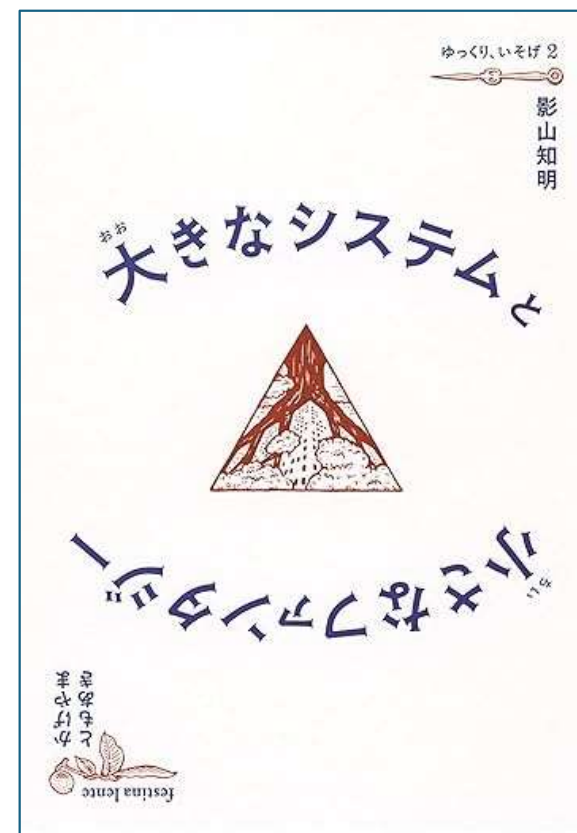
# 「ゆっくり、いそげ」からの歩み



発刊日：2015年3月21日



発刊日：2018年11月26日



発刊日：2024年12月1日

2

要旨

# テーマ【△と▽】

## △リザルトパラダイム

- 成果（リザルト）を最初に定義して、そこへと最短距離でたどり着こうとするやり方
- 工学的・機械論的なアプローチ
- 特定の理念や事業計画にメンバーが合わせる
- いそげ
- ルール
- 大きなシステム
- 客観（測れるもの）
- 育てる
- 変える
- 仕事に人をつける
- 多数決
- 灰色の男たち
- 上昇

## ▽プロセスパラダイム

- 成果を事前に定義せず、存在、関係性、縁といった過程（プロセス）を大事にするやり方
- 植物的・生命論的なアプローチ
- メンバーそれぞれが自分のいのちをのびのびと発揮し、その掛け合わせとしてお店が形をなしていく
- ゆっくり
- 想像力
- 小さなファンタジー
- 主観  
(目に見えない、説明できないもの)
- 育つ
- 変わる
- 人に仕事をつける
- 対話
- モモ
- 充足

本書を貫くテーマは、△と▽。ただ、単純に並べて語れない、両者の力量の差を表現するべく、現タイトルとなった「大きいと小さい」「システムとファンタジー」「ゆっくりといそげ」など、「矛盾を超えていくこと」が著者の一貫した哲学である

# 第一部 自分の時間を生きる

- マニュアルのような**システムは人間がつくるものなのに**、皮肉なことに、そうしてつくったシステムに**やがて人間が従属していく**。そのシステムがよくできたものであればあるほど。（P27第一章「誰の時間を生きているのか」）
- 大人の場合、たとえば今日はここに行くから何時に家を出なくてはいけないので夕食の支度を先にしておこうとか、また、二年後には独立するので資格は今年からとる準備をしなくちゃとか、逆算して「いま」やることを決めているわけです。つまり「**いまのため**」に「**いま**」を使っていることが**じつに少ない**。多くは、将来のために「いま」があるんです。これが大人の時間の使い方です。（P34第一章「自分の時間を生きるには」）
- ルールや禁止事項が増えるということは、世界を白か黒かに塗り分けてしまうということであるわけで、それはそれだけ、実は一人一人が不自由になっているということなのです。**ルールなんてできるだけない方がいいのです**。（P44第一章「ルールではなく、想像力で」）
- クルミドコーヒーには**理念がない**。[中略]でも、僕を含めた社員やアルバイトメンバー、一人一人の中にはそれがある。[中略]それらが持ち寄られることで、それらが重なりをつくるようにして、お店の方向性は定まっていく。（P75第二章「間ファンタジー性」）
- 明文化され、**固定化した理念がない代わりに**、ぼくらのお店には**変わらない問いがある**。「カフェとは何か？」「クルミドコーヒーとは何か？」「ぼくらはどんなお店を目指すのか？」[中略]いずれもはっきりした正解があるわけではない。（P76第二章「間ファンタジー性」）
- 明文化された理念や事業計画の場合、それが事細かに定められていればいるほど、それは関わる一人一人にとって制約としてはたらくことになる。（P90第二章「問いとは光である」）

## 第二部 いのちのありようから学ぶ

### ● 事業計画をつくるのをやめた（P116）

成果目標を定めることでメンバーの意識は自然とその方向へと向かう。そしてそれ以外の日々の出来事や店頭の状況への意識は反対に減っていく。新しいアイデアを共有しようとしても「それは計画には書いていない」と、消極的な反応につながってしまいかねない。日々は「しなければならないこと」で埋め尽くされていく。

### ● beとdoとhave（P154）

➤ 幼い時は「have」で考える（ぬいぐるみがほしい/スマホがほしい/彼女がほしい）

➤ 大人になると「do」で考える（オリンピックに出たい/大ヒットゲームをつくりたい）

未来のある到達点に向けて、自分の人生を振り向けていくことになり、未来のために今が手段化してしまう

また、達成したいゴールイメージを強く持つことにより、常に今の自分を「達成できていない自分」というマイナス状態に置くことになりかねない。

➤ そこで、be動詞「何を持ちたいか」「何をしたいか」ではなく「どうありたいか」

自分なりのbe動詞を見つけられたことでdo（すること/仕事や職業）はなんでもいいと思いきれるようになった

### ● 他動詞と自動詞（P230）

他動詞は他者をコントロールしたい、他者をコントロールできるという傲慢さを抱えている

「社会を変える」「人を集める」「人材を育てる」

人は育つものだし、人は学ぶものだし、人は変わるもの。育て、教え、変えるものではない

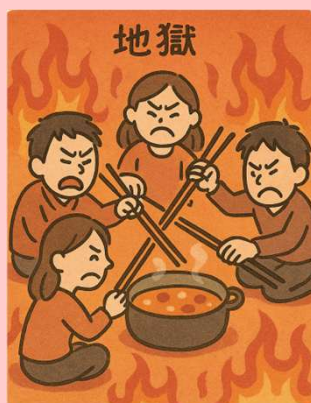
## 第三部 大きなシステムをひっくり返す

- つまり、勘違いしてはいけないと思うのは、どんなにいい経済や通貨だったとして、その実現を目指したいと考えたとしても、「**それらをつくるため**」に**人が生きているのではない**ということだ。何かつくり出したいもの、形にしたいシステムを先に定義して、そのためには……と考える道筋は、△（リザルトパラダイム）の罠にはまっている。それがどんなに素晴らしい成果を目指すものだとしても、**先にあるべきは、一人一人の内から自然に湧き起ってくる情動であり、それがつくり出す状況**なのだ。（P322）
- ぼくらは、あまりに目的にしばられている。それは利己的な目的に限らない。いわく社会課題の解決等、利他的なものである場合もそうだ。その**目的のために日々の仕事があるのだとすると、人や時間やいのちといったものすべては手段化する**。[中略]どんな目的や理念も、あなたが今ここに存在する理由のすべてを説明してはくれない。**あなたはまず、あなたのいのちを全うするためにここにいる**。その全うのために、何かしらの目的や理念との間に、重なりを見出すことは大いにあるだろうけれど。（P428）
- たとえばぼくらは、国のGDPを成長させるために生きているわけではない。会社の売上のために生きているわけではない。そのことは誰しも奥底では分かっているから、GDPや売上のためには最後の最後でがんばれない。[中略]むしろ、**目の前にいる、自分の愛する人によろこんでもらうためとなれば、人はがんばれる**。（P430）
- ある種の作品に触れたときに、それはまったく新しいものであるはずなのに、どこか懐かしい感じを抱くことがある。あるいは、自分がモヤモヤと感じていたものを、「まさに！」と言い当ててもらえる文章に出会うことがある。そういった経験をするのは、その表現者が他の人より少し深いところまで潜って、それをすくい取って、みせてくれるからなのだと考えることはできないでしょうか。（P458）

# 影山さんのファンタジー＜クルミド共和国＞

天国と地獄は同じ景色をしていて、どちらも真ん中に大きな鍋が煮えている。それぞれが手に持っているのは1メートルもある長いお箸。ここまでは一緒。

地獄ではみんなが我さきに食べようとするけれど箸が長くてうまく食べられず、誰もがイライラして喧嘩になります。



でも天国ではその長い箸で、自分ではなく周りの人に食べさせてあげようとするから、みんながうまく食べられて、満たされて幸せ。



影山さんがカフェからはじめた試みにより、大きなシステムに飲み込まれそうなこの世の中にプロセスパラダイムの輪が広がりつつある。それは一つの＜くに＞づくりのようなことかもしれないと影山さんは言っています。名付けて「クルミド共和国」。

その国には平等な法と政治、自由な芸術と教育、そして、友愛の経済がある。

そこでは一人一人が周囲の関わりの中からそれぞれにしかできないユニークな仕事をする。仕事に人をつけるのではなく、人に仕事をつける。

成功とか戦争とか、ウソとか忖度とか、まわりの目とか保身とか、そういう力に惑わされずに、一人一人が精いっぱい、自分のいのちを生きられる。

食うに困ったって大丈夫。長い箸を使って食べさせてくれる人がきつという。そしてその鍋は、きっとおいしくて楽しくて幸せだと思う。

---

3

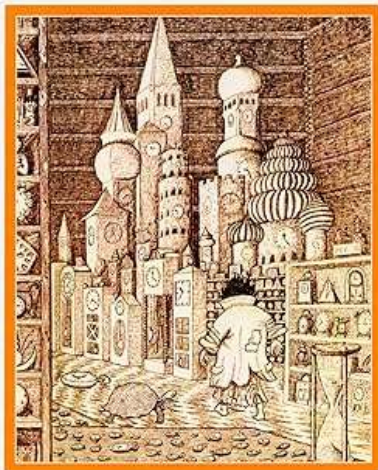
おまけ

---

# ミヒャエル・エンデ

## モモ

ミヒャエル・エンデ作  
大島かおり訳



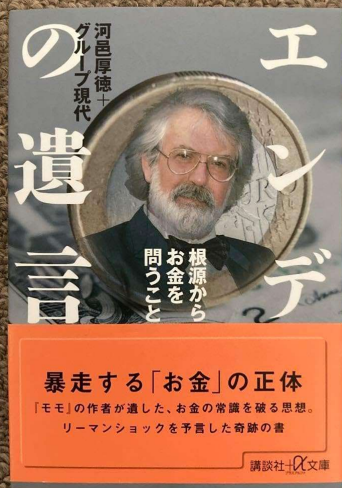
## 「モモ」

発刊は1973年（影山さんと同じ年）

時間を奪う「灰色の男たち」に立ち向かう少女モモの物語

まるで現代社会を予言したかのように、効率や忙しさに追われる私たちに

「本当に生きるとは」「時間とは何か」を問う



## 「エンデの遺言」

お金の本質に鋭く迫ったNHK番組から生まれたベストセラー書籍

「どうすればお金の支配から自由になれるのか？」現代のお金の

常識を破る考え方や地域通貨の試みの数々

映画「ロマンチック金銭感覚」

～お金って、なんだろう？～

お金の本質について問いかける！

# 黒姫童話館 & 童話の森ギャラリー



ミハエル・エンデさんの貴重なコレクションがあります  
1992年11月1日にはご夫妻で来館されたそうです



「エンデキャンプ」

2023年から影山さんの呼びかけで開催されている

10月には「エンデ学会」も開催される（今年は10/25,26）



# KURUMED COFFEE



西国分寺駅から徒歩 1分

平日は予約もできます♡

# 胡桃堂喫茶店



国分寺駅から徒歩 6分

とっても落ち着く空間でした

# ぶんじ寮

サンデーブランチ



ぶんじ寮の食堂



国分寺駅から徒歩  
15分

寮生の方々と



# 1 ページずつラジオ



## 1 ページずつラジオ（だいたい火曜22時、金曜15時）



本をゆっくりしか読めないあなたに



1 回30分、1 ページずつ読んでいきます

読む本は、影山知明著『大きなシステムと小さなファンタジー』

480日かかります

もっともこれは行みたいなのなので、終わることを目指しません

# クルミドの朝もや



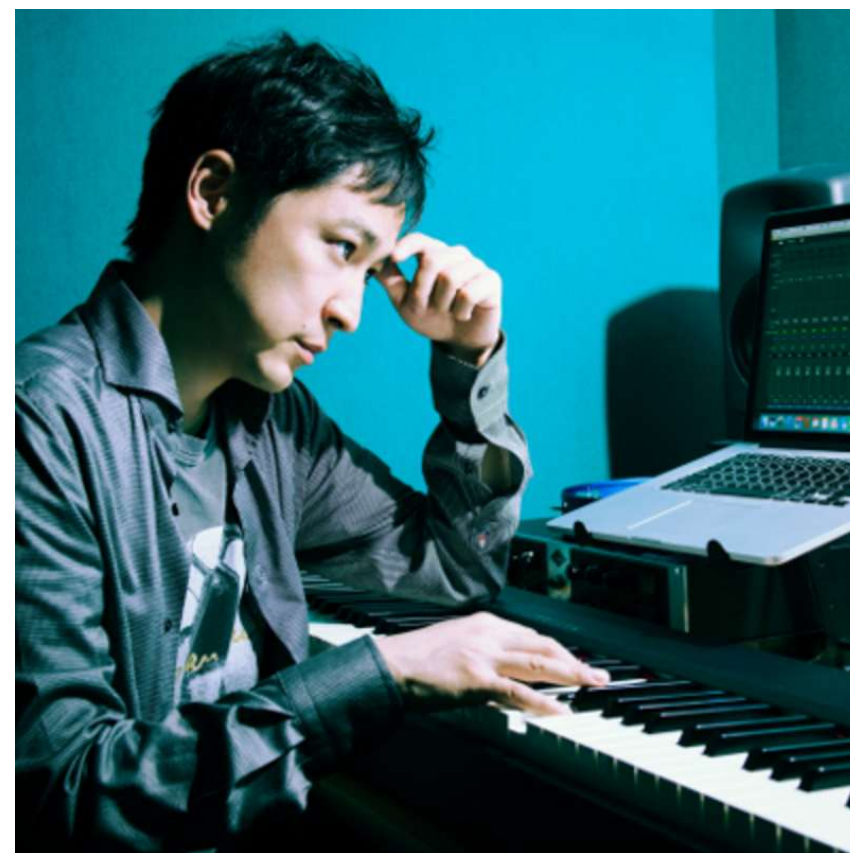
月に2～3回、日曜日の朝9～11時、珈琲を片手に語り合う哲学対話会。  
「正解」のない問いについて、自分や他人の声に耳を傾け、言葉を交わし合う場です。  
会が終わった後も、そこでのやりとりについて考え続けてしまったり、何かふとした瞬間に、「はっ！ そういえばあれってこれと関係あるかも…」などとひらめいたり。  
会の最中もその後も「モヤモヤ」とするということで、いつの頃からか「クルミドの朝」改め、「クルミドの朝モヤ」と呼ばれるようになりました。

私も一度参加してきました  
ちなみにその日のテーマは「子ども時代に、やりたくないことはやらないでいいのか？」でした

# ブック・サウンドトラック

「大きなシステムと小さなファンタジー」で描かれた世界観  
をピアノで表現したブック・サウンドトラック（全10曲）

1. Small Fantasy
2. Stems & Roots
3. Forest of Hearts
4. Clockwork System
5. Adventure Tale of a Squirrel
6. Fukashigi
7. Hurry Up Slowly
8. Passage
9. The Man Who Changed the World
10. Memories of Future



瀬名俊介さん

# 出版記念イベント

🎧 手放す TalkLive#048

『大きなシステムと小さなファンタジー』  
一つ一つのいのちが大切にされる社会へ

**続編**

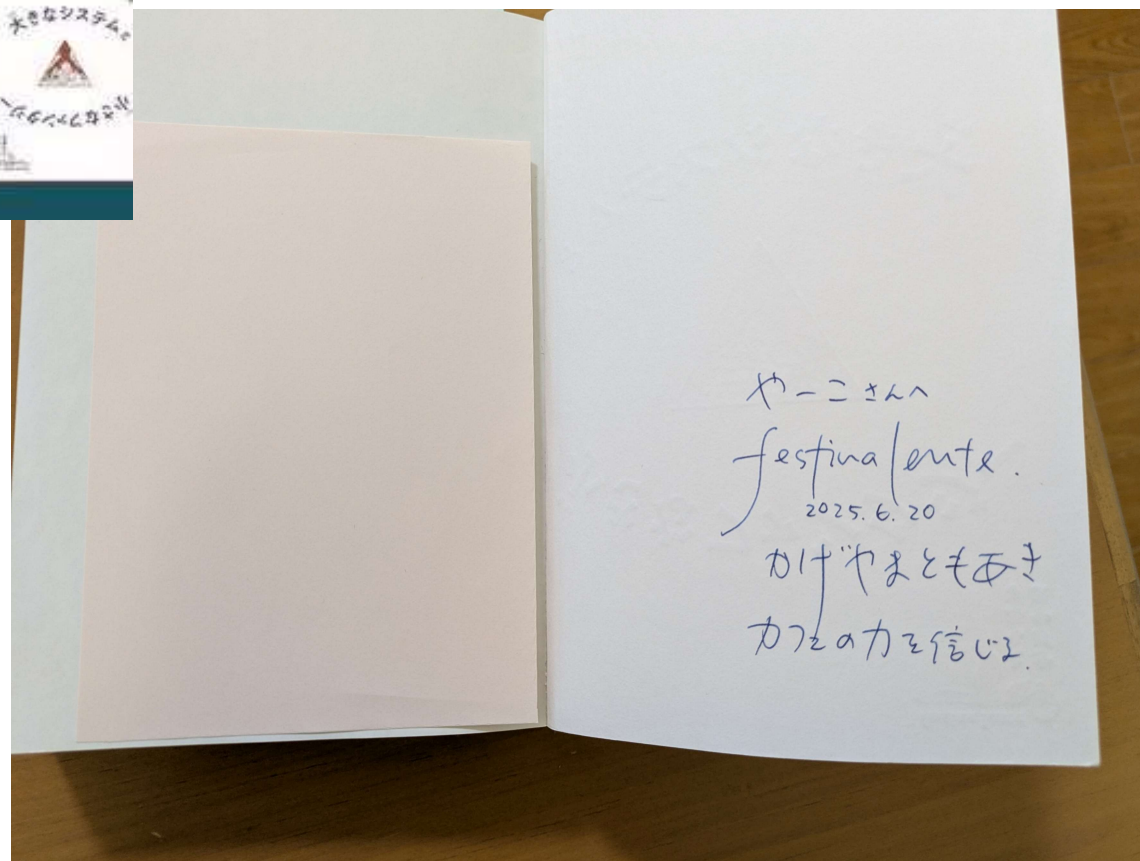
**Guest**  
クルミドコーヒー  
胡桃堂喫茶店 店主  
影山 知明

6/20 金曜日 19:00-20:30  
会場：ふれあい貸し会議室 渋谷No89  
(JR山手線 渋谷駅 徒歩1分)  
参加費：3,000円 (+書籍の事前購入)



出版記念のトークライブイベントに行ってきました

影山さんは一人一人と目を見て言葉を交わしてサインの万年筆のインクがつかないように紙を挟んで返してくれました





おしまい



---

---